

ソ連とわたくしと佛教學

水 谷 幸 正

わたくしとロシア佛教學

わたくしのソ連への傾斜は十數年まえにさかのぼる。

Ratnagotra-vibhāga のサンスクリット本を未だ入手することができず、そのチベット譯本 Uttara-tantra を讀みながら實性論を研究しつつあったときの有力な參考書が、オベルミラーによる英譯本であった。ロシアにおける佛敎研究の狀況が主としてチベットの流れを汲むものであることを、その英譯本の序文を讀むことによつて知ることができた。スチェルバックキーの “The Central

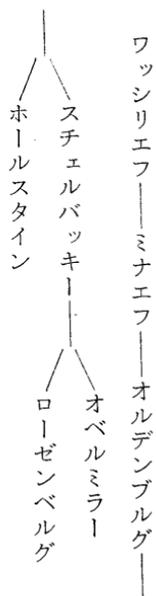
word 《dharma》”とか、あるいは “The Conception of Buddhist Nirvāna” という著書に親しみだしたのもそのころである。ロシアにもすぐれた佛敎學者がいるということを知っていたが、内容的な質においてこれだけすばらしいものとは思っていなかったので、ただ／＼驚嘆するばかりであった。そして、Silksamuccaya にはじまつて、Madhyānta vibhāṅga におわる三十卷のビプリオテカ・ブッディカを一覽するにおよんで、一九世紀末から二十世紀にかけての戦前のロシアの佛敎學が、原典の出版および翻譯ということを通じて世界の佛敎學界をリードしていたことをまのあたりに知ることができた。こうしたことを契機に、チベット佛敎學に關心

をもつようになってからも、ロシアにおける研究を無視することができなくなった。たとえば、ビブリオテカ・ブツディカ第十五巻はホールスタインによる Gandisto-tragāthā, Saptainastava, and Āryamañjirīnāmā-stacataka であるが、ロシア語によるその序文を讀まずしては韃稚梵語の比較對照研究の内容を把むことはできない。また、宗喀巴（ツオンカパ）のラムリムを研究するためには長尾雅人博士による毘鉢舍那章の日本語譯があるにしても、ツイビコフによるモンゴル本からのロシア語譯はどうしてもみのがすことができない。また、チベット醫學については、バドマエフやパヅドネーフによる研究をすどおりすることが許されないほどロシアではすぐれた成果をあげている。ロシア語によるこれらの文献を讀みあさっているうちに、わたくしはまったくロシアづいてしまったのである。

ロシア佛敎學の流れ

たしかに、かつてのロシアの佛敎學はレーニングラー

ド學派と呼ばれているように、ヨーロッパのそれにないで一つの學派を形づくるほどの力をそなえていたし、また特徴をもっていた。その特徴はサンスクリットやチベタンの原典による北傳佛敎の研究にある、といえよう。その開拓者のかのワツシリエフである。彼によつてロシア佛敎學はじまったといつても過言ではない。彼の學風がオベルミラーへとうけつがれてゆくのである。有名な佛敎學者によるその間の系譜を表にすればつぎのようになる。



これ以外にも有名無名のたくさん佛敎學者やチベット學者、モンゴル學者がいたことはいうまでもない。ワツシリエフが「佛敎の敎義、歴史、文献」という著書を出版したのが一八五七年であるから、スチエルバッキやオベルミラーが活躍した戦前までも八十年の歴史をもっているし、現在までいえば百十年以上の歴史がある

ことになる。戦前のロシア佛教學八十年の歴史を紹介するだけでも多くの紙数を必要とするであろう。それについてはまだ何かの機会に譲るとして、これらの學者のなかで、もっとも傑出した人物はなんといってもスチュエルバッキーである。彼の功績については、ここでとやかく述べる必要もあるまい。周知のところである。その詳しいことについては、金岡秀友博士の譯になる「大乘佛敎概論」の巻末にカリヤーノフによるスチュエルバッキー傳が載せられてある。また、今年度中にモスクワの科學アカデミアアジア諸民族研究所より、スチュエルバッキー生誕百年記念論文集が約二十五人の執筆者による論文をもつて出版される、ということであるから、それが出ればなおいっそう彼の名聲が高まることであろう。

戦後のソ連佛敎學についての紹介

ところで、戦後のソ連の佛敎學研究はどうなっているのか。過去に輝やかしい傳統があり、すぐれた業績が殘されているにもかかわらず、現況についてはほとんど知

られていない。インドやアメリカやヨーロッパにおける東洋學とくに佛敎學の研究狀況については、研究ジャーナルを入手することもできるし、また多くの學者たちによる系統的な報告もあるので、その大體を知ることができ。すぐれた業績發表があればすぐにわれわれの耳に入ってくる。ところがソ連についてはたいした業績がないのかもしれないが、その報告がないのである。たとえば、日本印度學佛敎學會から發行される學會誌「印度學佛敎學研究」には、彙報として海外の學界狀況をつねに紹介している。しかし、ソ連についてだけは全く紹介されていない。ただ、同誌第九卷第一號の三四一頁に、中村元博士稿「海外學界の歩み」のごく一部として十行ほど紹介しているが、それもリョーリフ博士（この人についてはあとで述べる）のチベットの語に關する一論文について述べているにすぎない。そのほか、同博士による世界の學界の動きが「いまの世界と東洋思想」（一九五五年刊）という本によって網羅されているが、その中でもわずかに二カ處（九四頁と一二〇頁）に數行述べているにすぎない。そこで簡単に紹介されているブランニコフはイ

インド文學者ですすでに亡く、カリヤーノフはスチュエルバツキーの後繼者であるとはいえ、佛教學についてはとりあげるべきものがない。その後、同博士によつて新聞に紹介されたモスクワ大學のペーテルソンも、現在は學問的仕事に従事していない。海外の學術事情にもっとも詳しい中村博士にして、このような報告しか聞くことができない。

すこしまとまつたものとしては、佐藤任氏稿「ソヴィエトにおける東洋學の現況」(密教文化、第五二號、一九六一年刊)があるが、さきのバランニコフの成果などを中心としたインド文學の紹介が主であつて、佛教についてはほとんどふれてない。そこで紹介されているトポロフの「ダンマパダー」(これについてはあとで述べる)についてはともかく、そのほかのコチュトフやザトウロフスキーについては、現在のソ連佛敎界では問題にされてない。

ソ連の佛敎學の現況についての唯一の紹介論文は金岡秀友博士稿「ソヴィエト佛敎學の現況」(國際宗教ニュース、五ノ三、一九六四年刊)である。てぎわよくソ連

佛敎學の特色およびその方向をまとめており、まことに貴重な報告であるが、筆者みずからがことわつておられるように、中國の「現代佛敎」誌一九六四年一月號に掲載された「ロシアの佛敎研究」というルチーナの論文などを參看しつつ、入手しえた資料にもとづいて述べたものであつて、直接それを明きらかにするソ連の報告は利用してない。

リョーリフのことなど

かくして、「ソ連における東洋學とくに佛敎學の研究現況」は現在どうなつてゐるか、ということが、十數年來のわたくしにとつて氣がかりになつていた。できうれば、モスクワ大學やレーニングラード大學、あるいはスチュエルバツキーによる佛敎文化研究所としての傳統を受けついでゐるアジア諸民族研究所などを訪問して、この眼でいろいろなことをたしかめてきたい、というのがかねてからの念願であつた。昨年夏「ソ連における宗教と文化——とくにラマ敎の形態——の調査研究」の豫備調

查として、龍谷大學教授芳村修基博士と訪ソする機會を得たので、おおざっぱではあったが、時間のゆるすかぎりこれらの研究所を訪れ、その大體を知ることができ、いくぶんなりとも念願をはたすことができた。そのことについてのアラカルトを制限された紙數の中で、ここに紹介することしよう。

戦後のソ連の佛教學者としては、まずリョーリフ(Ro-erich あるいは Rerikh とローマナイズされて、レーリッヒ、ローリッヒ、レーリックなど日本ではいろいろに呼ばれているが、ロシア語からのローマナイズであれば Rjovrikh がただしい)をあげねばならない。インドを據點に永く海外で生活し、一九五七年にソ連へ歸り、戦後における佛教學の復興をうながし、すぐれた成果をあげるであらうと期待されたが、一九六〇年五十七歳で急に亡くなった。彼の傳記や業績については、*Indo-Iranian-Journal, vol. v. Nr. 2* (一九六一年刊)に詳しい。現在活躍している學者は多かれ少なかれ彼の影響を受けていないものはない。そういうことから、彼を戦後の第一人者にしてもおかしくないが、その業績からみて、佛教學者

というよりはチベット學者といふべきであろう。"The Blue Annals"や"Biography of Dharmasvamin"の出版からして、佛敎史研究の第一人者に彼をあげることにやぶさかでないが、やはり佛敎プロパーの學者とは言いえない。こういっただころに、彼によつて代表されるソ連佛敎學の一つの性格づけがみられる。

かのオベルミラーはリョーリフより一歳しか年上にすぎない。一九三五年にわずか三十四歳でこの世を去つたオベルミラーが、もし平均年令だけ生きていたら、スチエルバッキーの後繼者として、むしろ師以上に佛敎學者としての令名を世界にはせていたことであらう。さきの實性論の英譯をはじめ、現觀莊嚴論やバーバナクラマなどの原典出版およびその研究、プトンの佛敎史の英譯など、若くして意欲的な成果をつぎつぎに發表していっただけに、その死はまことに惜しまれてならない。若し彼が生きていたならば、戦後のソ連佛敎學はオベルミラー、リョーリフの二人が中心になっていたことであらう。

科學アカデミーアジア諸民族研究所の中にアルヒーフをかねたりョーリフ記念研究室がある。ここが、モスク

ワにおける佛教學およびチベット學研究の唯一の據りどころである。百ヘーベぐらいの廣さの部屋の四面に書棚をおき、正面の壁にはリョーリフの肖像畫をかけ、書棚には彼の藏書、チベット蒐集資料、記録など未整理のものも含めて、ぎっしりとつまっている。そこで約十五人の研究員が研究にいそしんでいる。チベット學研究者四人、佛教學研究者六人、その他は東洋學關係の研究者である。スチュエルバッキの弟子で、ウラン・ウデのガนมルマン女史と共に「チベット醫學辭典」を一九六三年に出版したセミチヨフ氏と、ウラン・ウデのチベット藏經目錄を一九六一年に出版したダンダロン氏の二人の協力によって、一九六三年に藏露辭典を出版したパルフィオノピッチ氏が、そこでさらに詳細な辭典の編纂にとりこんでいる。インド佛敎研究のピャチゴルスキー氏、リョーリフの門弟で種々の梵文文献を翻譯し、ジャータカマールラの研究をしているボルコワ女史、現代の佛敎を研究し宗教委員會の顧問をしているデリコフ氏、その息女でチベットフィロロジイを研究しているビレーナ女史、リョーリフについてセイロンから研究にきているセ

メカ女史などが、そこで研究に従事している。ビレーナ女史は女子學生という感じのうら若いブリヤート女性であるが、チベット學についての深い造詣をもっている。セメカ女史はリョーリフの著作や論文について整理をしており、今年度中にそれを出版することであった。これらの諸學者をリードしているのが、同じくリョーリフの門弟であるボンガード・レービン氏である。彼はモスクワ大學の講師も兼ねている新進氣鋭の學者であり、インドフィロロジイとくにサンスクリット寫本の研究を通じて佛敎の解明に貢献している。これからのソ連の佛敎學研究を代表する第一人者になるのはおそらく彼ではないだろうか。最近ではボルコワ女史と共にアショカアバダーナについて、またレーニングラードのチョムキン氏と共にダルマシャーリストラや涅槃經や法華經について、それぞれの梵本の研究を發表している。ソ連にはオルデンブルグが中央アジアから將來した未發表のサンスクリット寫本がたくさん藏されている。まことにうらやましいかぎりだ。今後はこれらの寫本がボンガード・レービン氏を中心にどんどん紹介されてくることであろう。

佛教學研究のありかた

レーニンググランドにはさきのキャリアーノフ氏やチョムキン氏のほかに、中國文學者でもあり、オルデンブルグ將來の敦煌寫本の目錄を作製しているメンシコフ氏、モングール學者のイオーリシ氏、チベット佛教學者でチョムキン氏と共に、オベルミラーの「バーバナクラマの研究」について紹介しているパンクラートフ氏、サンスクレットの佛敎文獻について研究しているデシャトフスカヤ女史（リョーリフの弟子で、一九五六年に二十八歳の若さで惜しまれつつ亡くなったサンスクレット文學者であり、佛敎原典についても發表している、デシャトフスキー氏の夫人）などが活躍している。また、モスクワの科學アカデミー哲學研究所のクタソーバ女史は龍樹についての研究家であり、スチエルバツキーについても詳しく紹介している。このほか、マンスリーに出版されている「科學と宗教」などの雑誌に發表されている最近の佛敎關係の論文から若干の學者名をあげることができる

が、いまはそれを割愛しよう。ただ、最近のものとしては、昨年出版された「コンラッド七十五歳頌壽記念東洋學論集」（コンラッド博士はアカデミー會員であり、東洋學者の元老である。トインビー博士と文明史論について論争したこともある）の中にピャチゴルスキー氏による「佛敎哲學における人間類型の表徴」、ザバドスカヤ氏による「サリンジャーは禪に何を求めているか」、およびボンガードレービン氏とチョムキン氏による「ダルマシャーリストラの文獻研究」という三つの論文があることだけを紹介しておこう。なお、さきにも述べたように、いずれスチエルバツキー記念論文集が出版されて、そこに約二十五人の學者がずらりと名をたらねるはずであるから、それによってソ連佛敎の現状をほぼ知るることができるであろう。

さて、わたくしが見聞したところにもとづいて、現在のソ連佛敎の方向、性格をまとめてみると、だいたいつぎのように言える。

出版されたものの成果としては寫本研究がさかんである。さきの敦煌目錄は七百頁からのものがすでに二巻出

版されており、日本の目録も三巻出ているし、西夏語の目録もあるというように、いわば寫本ブームといつてもよいほどである。その傾向にのつて、ボンガードレービン氏やチョムキン氏やデシャートフスカヤ女史などが、サンスクリット寫本についての研究成果を發表しているのである。

リョーリフの業績が戦後の研究動向の一エポックを劃している。これはさきに述べたとおりである。

戦前からの一つの傾向であるチベット佛教研究による佛教の把握ということが、現在でも受けつがれており、とくにブリヤート人によるラマ教の研究がさかんである。

フィロロジカルな研究が支配的である。これは寫本研究と相關連していることであるが、ただ言語學というだけではなく、いわゆる文獻學に中心をおいている。

古い時代の歴史的研究よりも、現代社會との關連においての研究が壓倒的である。これは佛教學にかぎらず東洋學全般にわたつていえることである。

考古學の研究が比較的にさかんであり、遺跡の發掘が

あちこちでおこなわれている。とくに、中央アジアの遺跡發掘に力を入れている。タジク共和國のドシャンベ南方約五十軒のところにあり、アジナ・テペの一九六一年における發掘では、六、八世紀ごろと推定される寺院跡を復元し、身長十一米におよぶ涅槃像を發見している。

このテペは日本の京大調査隊が現在發掘しているアフガニスタンのクンズーツにおけるチャカラク・テペにおそらくつながるものであらう。この二つのテペ(遺跡の丘)は國こそ異なれ、山一つを距てた隣りどうしである。アジナ・テペの發掘ならびにその研究を指導しているのは、ドシャンベ歴史研究所のリトビンスキー博士である。

佛教學プロパーの佛教學者はおらない。いいかえれば、専門の佛教學者が佛教を研究しているのではなく、歴史學者、考古學者、言語學者、インド文學者、中國文學者、美術學者などが、その關連において佛教を研究しているのである。これはソ連にかぎったことではなく、ヨーロッパやアメリカにおける一般的な傾向である。専門の佛教學者によつて支えられている日本の佛教學界と

比べて、そのありかたにおいて、相互に示唆されるものがあると思う。

東洋學全體からいえば、佛教學に關するものは寥々たるものである。たとえば、昨年夏アメリカ・アンナーバのミシガン大學で開かれた、第二十七回東洋學者會議におけるソ連の研究發表者は（政治的な理由かなにかで實際は參加しなかったが、參加申込のプログラムによると）、九十人あまりであるが、その中で佛敎關係のものは、ボンガード・レービン氏の涅槃經のサンスクリット寫本の研究と、リトビンスキー氏のアジナ・テベ佛敎遺品の研究の二つのみである。さきに述べたように、コンラッド論文集でも五十數篇の論文のうち佛敎は三つのみである。革命五十周年を記念して、科學アカデミーアジア諸民族研究所から「ソ連東洋學五十年の概観」が昨年出版された。それによると、日本文學研究、インド學、シナ學など二十七の分野にわけて、過去五十年の學界の歩みが通覽されているのであるが、佛教學には獨立した分野は與えられておらず、インドフィロロジの分野などで少しふれられているにすぎない。

ソ連佛敎學の傾向はみぎのごとくであるが、最後に、ビブリオテカ・ブッディカが續刊されていることをつけ加えて筆をおこう。戦前に第三十卷でおわつたこの叢書は、一九六〇年にリョーリフの編集のもとに、デシャトフスキー記念と銘うってトポロフ譯註の「ダンマパダー」が第三十一卷として、一九六二年にボストリコフ（一九三七年に死亡）の遺著である「チベットの歴史的文獻」に戦後のビブリオグラフィをつけ加えたものが第三十二卷として、それぞれ出版された。第三十三卷以後についてはまだ聞かない。しかし、今後は續々と出版されるであろうことを期待してやまない。なお、近くノーボスチ通信社の記者でありながら佛敎について造詣の深いエルモシキン氏によつて、「ソ連における佛敎」という英文の小冊子が出版されるということである。それを讀めば現在のソ連の佛敎事情について知ることができるであろう。

(一九六三・一・二〇)